白梅学園大学・短期大学紀要　43：1～14（2007）

老いと自己概念からなる中高年期発達モデルの作成と妥当性の検証

若本　純子

論文要旨

本研究は，30～75歳の中高年期成人2026名を対象に，老いと自己概念からなる中高年期の発達モデルを作成し，妥当性の検証を行った。まず先行研究の知見を集約し，理論仮説モデルが構成された。次に共分散構造分析を用いてモデルの検証を行ったところ，十分な値の適合度が得られた。加えてモデル細部と先行研究との間にも整合性が見られた。これらの結果を総合して，本研究モデルのもつ妥当性が示唆され，中高年期発達を捉えうるモデルとして同定された。

キーワード

成人発達，老い，自己概念，共分散構造分析

問　題

成人発達研究では，人生後半の心性が，老い，すなわちそれまでには見られなかった自己の体力や身体機能の衰え，社会的な限界の認知，死への直面などの影響下にあることが認められている（e.g., Lachman & Bertrand, 2001；岡本，2002）。発達は環境的・文脈的要求によって進展する（Baltes, 1987）。したがって，人生後半における発達は老いとの相互作用の中で生じ，老いによって特徴づけられると理解されよう。一方，自己概念は発達およびwell-beingのための心理的資源として知られ（Baltes & Baltes, 1990），自己概念をめぐる成人発達研究は広範かつ多数存在する（Lachman & Bertrand, 2001；岡本，2002）。しかし，それらは主として包括的自己概念を用いた研究であった。成人期の発達が多くの機能領域で個別に展開する（Whitbourne, 2002）ことを踏まえたとき，成人発達の詳細を捉えるための方法論としてはさらなる検討の余地があろう。それに応えうるのが自己を多面的・多次元的に捉える枠組である。近年の社会認知的自己研究において，自己概念は多次

Junko WAKAMOTO : Construction Developmental Model in Middle and Late Adulthood Consisting of Aging and Self-Concepts and Testing its Validity

元性を有する動的な認知的構成概念として理解され，その構造と機能の解明が試みられている（e.g.，伊藤，2002；Marsh & Hattie，1996）。その中で，日常的な文脈における我々の自己への注目と評価は，個別の領域や部分に対して行われることが知られており（e.g.，水間，2002），成人発達の詳細を十分に捉えうる枠組みと目される。さらに，領域個別的な自己概念を導入した研究とは，老いの時期においてとくに重要となるトレードオフの課題（長谷川，2000），すなわち限られた資源をどの領域にどのように配分するかという課題を始めとして，人生後半の発達におけるメカニズムとダイナミズムを俯瞰しうると考えられる。

若本は，これまで老いと多面的・多次元的に構成される自己概念とに注目して，人生後半の発達に関する検討を重ねてきた。しかし，それらは老い（若本・無藤，2006a），老いと自己評価（自尊感情と領域個別的自己評価）の関連（若本・無藤，2006b），および若本が成人の発達的特徴を抽出するために設定した自己概念の次元である「関心」と自己評価の関連（若本，2003；若本・無藤，2004）を個別に検討したもので，老いと自己概念の包括的な相互関連性に基づく発達モデルの作成，およびその検討には至っていない。

そこで，本研究は，老いと自己概念を用い，人生後半の発達モデルを構築することを目指す。近年，理論仮説をモデル化するにあたって構造方程式モデリングStructural Equation Modelingが多用される（服部，2002，以下SEMと記述）。SEMによるモデル作成と検証は，1）何らかの理論や研究成果に基づいて仮説を設定してモデルを構成する，2）共分散構造分析を実施し，モデルの妥当性を評価するという手続きをとる（山本・小野寺，1999）。したがって，本研究の第1の目的として，若本による先行研究を集約し理論仮説モデルを設定する。第2の目的として，作成したモデルを共分散構造分析によって評価する。その際，適合度を用いた検証に加え，整合性すなわちモデルの細部が他の知見と矛盾がないかという視点からも評価を行うものとする。

本研究における概念規定と方法論

ここで本研究において用いられる変数，概念および方法論的立場を説明する。

人生後半の発達を捉える枠組みと仮説　本研究においては人生後半の発達を捉えるにあたり，老いを，発達過程を構成する中核的要因と位置づける。さらに，老いとは老化のみに限らない，加齢に伴って身体生理・心理社会・生活経済面などに生じる肯定的・中立的・否定的変化および状態とする。また，人生後半において共通して経験される軽微な老いは，自己概念のもつ媒介機能という心的メカニズムを通して成人の心理およびwell-beingに影響を与えるものとし，自己概念には発達的差異および特徴が内包されるとする。

中高年期および下位年齢群　本研究では，40前後から70代半ばに至る期間を，深刻なダメージを与えない程度の比較的軽微な老いを伴う発達的連続性をもつ発達期と捉える。それに際し，比較的軽微な老いの影響下にある一連の発達期を“中高年期”と呼称する。さらに，先行研究（Heckhausen, 2001）において発達的差異が指摘されている，中年前期（40

代)，中年後期（50～65歳)，そして軽微な老いの影響下にあるという点で中年期との連続性が示唆されるポスト中年期（66～75歳)，統制群としてプレ中年期（30代）を加えた4つの年齢群を中高年期の下位分類として設定する。

本研究において使用する自己概念 本研究では，自尊感情，領域個別的な自己評価，領域個別的な関心（以下「関心」と表記）という3種の自己概念を用いる。自己評価が老いの時期において，重要な資源である（Baltes & Baltes, 1990）ことは先に述べたとおりである。一方，「関心」は，若本・無藤（2004）において設定された“重要性”（e.g., James, 1890）に成人発達的特徴を加味した概念である。すなわち，老いという人生初めての経験によって喚起される自己に対する積極的（気にする)・消極的関与（気になる）を意味する。

方法論的立場 成人発達では性差への配慮が必須とされる（Lachman & Bertrand, 2001)。性差に関しては，男女間の比較という方法論もありうるが，発達経路そのものが異なるとの指摘（Gilligan, 1982/1986）を重視すれば，男女の直接比較を行うよりも，各々が異なる発達的変化の過程をもつものとして別途扱っていくことが妥当であろう。本研究はこのような考え方に基づき，男女の発達経路を個別に検討する。加えて，その機能の複雑さゆえに，自己概念の検討においては次元や領域を特定する必要性が示唆されている（e.g., Graziano, Jensen-Campbell, & Finch, 1997)。これらの知見を考慮し，モデル作成および評価は各自己領域別に行うこととする。

方　法

本研究の実施にあたり3回の質問紙調査を実施した。

調査内容 ①主観的老いの経験26項目5段階評定（若本，2003)。中高年成人誰もが経験する比較的軽微な老いのエピソード4因子（「身体の不調」:項目例“疲れやすくなった”“運動能力が低下した”など8項目，「心理社会面の減退」：項目例“今の流行にうとくなった”“記憶力・理解力が低下した”など5項目，「志向の転換」：項目例“健康への関心が増した”“自分らしさについて考えるようになった”など7項目，「余裕と成熟」：項目例“楽に生きられるようになった”“経済的に余裕ができた”など4項目）からなる老いを包括的に捉える尺度。この数ヶ月に経験された程度の評定を依頼した。②領域個別的な自己評価および「関心」各16項目5段階評定（若本，2003；若本・無藤，2004)。領域個別的な自己概念を測定するために用いる。外見4項目からなる「外見的自己」，職業や役割など社会的側面3項目からなる「社会的自己」，性格，家族など個人の中核である心理社会面5項目からなる「内的自己」，日常生活の中で感じられる明細化されにくい自己概念のうち，健康，体力の2項目を「生活的自己（健康)」，経済，生活の2項目を「生活的自己（経済)」という5領域から構成される。この因子構造は，中高年期固有の発達的特徴を反映することが見出されている。自己評価では，どの程度満足しているか，積極的・受動的関与を表す「関心」で

は，どの程度気にかけているか／気になるかについて評定を求めた。③Rosenberg自尊感情（星野，1970訳版）10項目5段階評定。④フェイス項目。年齢，性別，職業（無職，専業主婦，有職），経済的不安の有無，教育歴（中卒，高卒，専門・短大卒，大卒，大学院卒），婚姻歴（未婚，有配偶者，死別，離別），子の有無，居住状況（独居，夫婦のみ，親または子との2世代，拡大家族）の8項目。

調査対象と時期および回収　調査1　対象：30～65歳男女1800名。筆者の知人およびその紹介者。時期:2001年6～7月。回収:1020名（回収率56.7%）。調査2　時期:2003年2月。対象：N県A高校の卒業者66歳～75歳男女1200名。いずれも在宅である。A高校は工業が主産業である地方都市（人口約24万人）の公立高校である。調査対象者が在学の頃に戦後の学制改革によって5校が統合し設立された。回収：722名（回収率60.2%）。調査3　時期：2003年6～7月。S県B高校卒業者37～60歳男女1500名。B高校は首都圏のベッドタウン（人口約7万人）の公立高校である。創立50年弱と比較的歴史の浅い高校である。回収：347名（回収率23.1%）。

調査手続　協力者のプライバシーに配慮し，郵送にて個別依頼・個別回収した。

分析対象者およびサンプルの特徴　3回の調査で回答を得られた2089名のうち，年齢未記入，不完全回答のものを除外した2026名を分析対象とする（平均年齢55.10歳）。性・年齢による内訳は，男性：プレ期148名，中年前期187名，中年後期202名，ポスト期378名，女性：プレ期234名，前期263名，後期278名，ポスト期336名である。

結　果

確認的因子分析結果と合成変数の内的整合性

老いおよび領域個別な自己評価と「関心」の3尺度については確認的因子分析を実施した。適合度指標は，老い：GFI=.94，AGFI=.92，RMSEA=.05，自己評価：GFI=.96，AGFI=.94，RMSEA=.05，「関心」：GFI=.96，AGFI=.94，RMSEA=.05であり，適合と見なしうる値であった（服部，2002）。また，各因子の素点を合計し項目数で除したものを合成変数の得点としα係数を算出したところ，以下の結果が得られ，一定の内的整合性が確認された。主観的老いの経験：身体の不調（.77），心理社会面の減退（.74），視点・志向の転換（.70），余裕と成熟（.66），自己評価：「外見的自己」（.71），「社会的自己」（.75），「内的自己」（.73），「生活的自己（健康）」（.76），「生活的自己（経済）」（.70），「関心」：「外見的自己」（.74），「社会的自己」（.77），「内的自己」（.81），「生活的自己（健康）」（.73），「生活的自己（経済）」（.73），自尊感情（.81）。

理論モデルの作成：先行研究結果の集約から

ここでは先行研究の結果を総括し，理論仮説モデルを作成した。理論モデル構築プロセ

スと結果をわかりやすく示すために，設定されたパスを記号化し，Figure1に対応させて記載した。

自己概念をめぐるパス　先行研究（e.g.，伊藤，2002）によれば，自己評価と自尊感情の因果的関連性には，評価から自尊感情，自尊感情から評価という双方向の関連が想定されているが，本研究では，若本・無藤（印刷中a）がMarsh & Hattie（1996）に則って実証した自己評価と自尊感情との階層的な関連性の知見に基づき，自己評価から自尊感情へ向かうパスを想定する（β_{32}, Figure1参照）。「関心」は，中高年期の発達的文脈を考慮し，“重要性”の代替概念として導入され，自己評価との交互作用を想定する変数として用いられている（若本，2003；若本・無藤，2004）。その考察において，「関心」の認知過程における位置づけは，中村（1990）が言うところの認知過程の冒頭部である“自己に対する注意・注目の過程”に類似すると示唆されている。よって，自己評価から自尊感情に影響を及ぼすプロセスの前に「関心」は配置され，自己評価への影響を示すパス（β_{31}）を描くことが可能であろう。ここから，「関心」→評価→自尊感情という，自己概念をめぐる関連性とプロセスを設定する。

老いをめぐるパス　老いについては，本研究と類似した枠組みの先行研究は存在しないため，よりていねいな吟味を行う必要がある。本研究では，老いを，身体面・心理社会面の衰え，「志向の転換」，「余裕の成熟」という4側面からなる多面的なものとして捉えた。よって，この多様性に配慮した上で，老いの性質に関する検討結果（若本・無藤，2006a），および老いと自己評価との関連（若本・無藤, 2006b），老いと「関心」との関連（若本，印刷中b）を踏襲してパスを設定することが求められる。まず，「余裕の成熟」は，自己評価に対する多大なかつ広範な規定力をもつことが明らかになっている（若本・無藤，2006a）。ゆえに，自己評価へ直接的に影響を示すパスが同定できるだろう（β_{24}）。

衰えに関しては，老いの主たる徴候として中高年期発達に対するインパクトを持っていることを踏まえると，さまざまな角度からの影響が考慮される。第1に，若本・無藤（2006a）において身体面・心理社会面の衰えの相関は非常に高かった。したがって，双方を「衰え」として総括し，潜在変数として扱うのがモデルの精度を高めると思われる。第2に，衰えは「志向の転換」，すなわち老いに伴う自己変容を促すことが示唆されている（若本・無藤，2006a）。よって，衰えから「志向の転換」へのパスの設定も有効であろうと思われる（β_{11}）。第3に，衰えの経験は，老いの主たる徴候であるため，自己概念に対する明確な影響をもつと思われる。前述したとおり，自己概念による老いの媒介過程は，「関心」→自己評価→自尊感情というプロセスとして想定されている。よって，老いは「関心」に対して影響を及ぼすものとしてパスを設定できるであろう。ただし若本・無藤（2006b）では，女性の中年後期，ポスト期では，身体面の衰えが外見・健康両面の自己評価を低下させるという影響のみが有意であったとの結果も示されている。したがって「関心」を介さず，衰えが自己評価に対して直接的にネガティブな評価を喚起する場合も想定せねばな

らないだろう。よって，衰えから「関心」へのパス（β_{21}），衰えから自己評価へのパス（β_{22}）双方を設定する。

「志向の転換」は，若本（印刷中b）において，「関心」を喚起する老いの側面であることが見出されている。一方で，上述した，衰えの経験は「志向の転換」を促すことが見出されているとの知見（若本・無藤，2006a）を併せると，衰え→「志向の転換」→「関心」というプロセスが想定される。よって，衰えから「志向の転換」（β_{11}），「志向の転換」から「関心」（β_{23}）というパスを設定する。さらに，「志向の転換」に示される老いに伴う自己変容の自覚を促すのは，衰えのみならず，加齢に伴って生じる肯定的な変化の認知も該当するであろう。若本・無藤（2006a）では，老いの肯定面である「余裕と成熟」と「志向の転換」の2つの関連が，中年後期の発達を特徴づけるとされている。加えて，若本・無藤（2006b）における「余裕と成熟」が自己評価に対して広範な影響力をもつとの知見，および若本・無藤（2006a）において見出された「志向の転換」がもつ中高年期発達に対するインパクトを考慮するときに，この2つの関連性はモデル内に想定すべきであろう。配置に関しては，「志向の転換」が衰えからの喚起によって生じるとの見方から，老いをめぐる認知プロセスのより後部に位置づけられること，また「余裕と成熟」が老いの肯定的側面として，衰えのもつネガティブな影響力と等価の影響力をもつと示唆されるため（若本・無藤，2006b），衰えおよび「余裕と成熟」がいずれも「志向の転換」を促すものとして導入することが妥当であると考えられる（β_{12}）。

以上のパスに関する考察過程をTable1にまとめて示す。さらに，理論モデル構築プロセスを総合した，SEMによる老いと自己概念からなる中高年期発達モデルをFigure1に示す。

Table1　先行研究結果に基づく理論仮説モデルにおけるパスの設定

	若本・無藤（2006a）	若本・無藤（2006b）	若本（印刷中a）	若本（2003）， 若本・無藤（2004）
研究概要（関連部分のみ）	多面的に構成される老いの生態学的性質と年齢群差の検討を行い，身体面と心理社会面の衰え，衰えと「志向の転換」における中程度の相関が見出された。加えて，「志向の転換」を含む相関において，中年後期と他の時期との間に有意差が見出された。	老いと自己評価との関連を検討し，老いがwell-beingの重要な構成要素であること，「余裕と成熟」がポジティブかつ広範囲な影響を示し，衰えのネガティブな影響は限局化・最小化されると示唆された。	5自己領域に対する評価と自尊感情との関連の検討から，中高年期全体を通しては内的自己が，中年前期・ポスト中年期では社会的自己・生活的自己（経済）も有意な説明変数であることが明らかにされた。	5自己領域に対する「関心」と評価の交互作用と自尊感情との関連の検討を行った結果，「関心」がもつ自尊感情の低下に対するリスク緩和作用が見出された。また有意な交互作用は中年前期，ポスト期で見出された。
老い→老い	1. 衰えの2相（身体面・心理社会面）の高相関→2変数をまとめて潜在変数に 2. 衰えが「志向の転換」を促す→「衰え」から「志向の転換」へパス（β_{11}） 3. 「志向の転換」と「余裕と成熟」の関連性が発達的意義をもつ，「志向の転換」は老いをめぐる認知プロセスのうち後部に位置づく→「余裕と成熟」から「志向の転換」へパス（β_{12}）			
老い→自己概念		1. 「余裕と成熟」が自己評価に対して広範な影響をもつ→「余裕と成熟」から評価へのパス（β_{24}） 2. 衰えが自己評価を低下させる→衰えから評価へのパス（β_{22}）		1. 「志向の転換」が「関心」を喚起→「志向の転換」から「関心」へのパス（β_{23}） 2. 「関心」は注意過程として示唆→媒介機能の頭初に位置づけ＝老いから「関心」へのパス（β_{21}，β_{23}）
自己概念→自己概念			多面的自己評価によって自尊感情が規定される→評価から自尊感情へのパス（β_{32}）	「関心」は注意過程として示唆→媒介機能の頭初に位置づけ＝関心から評価へのパス（β_{31}）

注．上記に示した各研究のサンプルは本研究と同サンプルである（ただし若本・無藤，2004を除く）

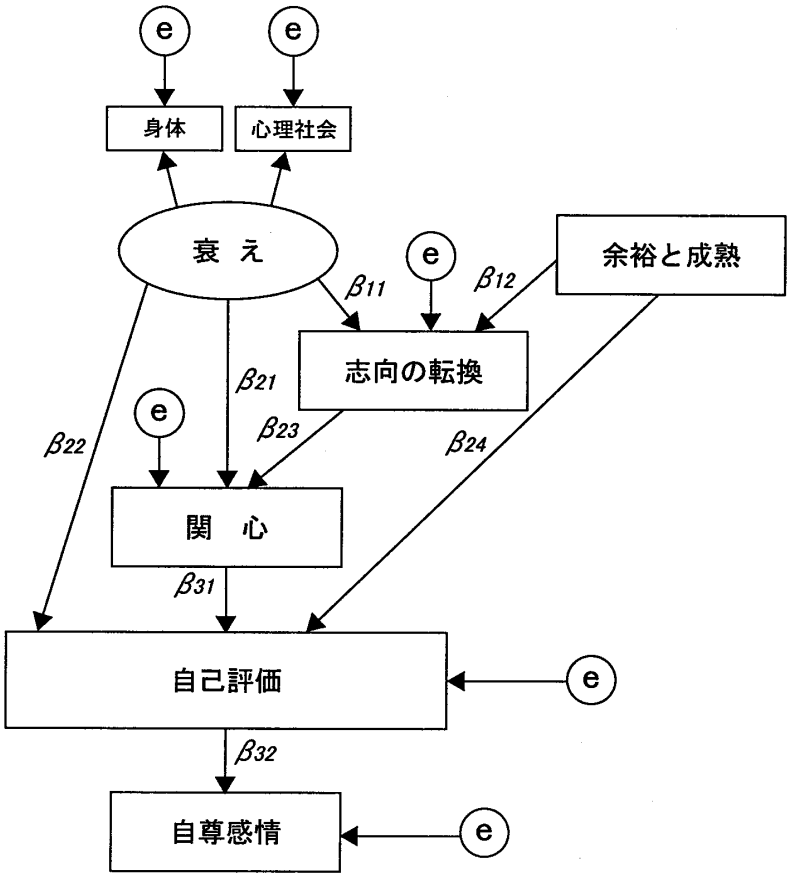

Figure1　SEMによる老いと自己概念からなる中高年期発達モデル

モデルの評価：共分散構造分析を用いた妥当性の検証

Figure1のモデルを用いた共分散構造分析を5自己領域別に行った。分析結果のうち，適合度をTable2に，パス係数（標準化係数）をTable3に示す。

Table2　SEMモデル分析結果（適合度）

自己領域	GFI	AGFI	RMSEA
外見的	.95	.86	.05
社会的	.94	.85	.05
内的	.95	.86	.05
生活的（健康）	.94	.84	.05
生活的（経済）	.93	.82	.05

Table3　SEMモデル分析結果（パス係数）

a）外見的

	男				女			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
老い→老い								
β_{11} 衰え→志向の転換	.44 ***	.47 ***	.64 ***	.58 ***	.60 ***	.58 ***	.46 ***	.60 ***
β_{12} 余裕と成熟→志向の転換	.23 **	.20 **	.32 ***	.20 ***	.24 ***	.19 ***	.34 ***	.19 ***
老い→自己概念								
β_{21} 衰え→関心	.43 ***	.24 *	.35 **	.45 ***	.26 **	.34 ***	.26 **	.55 ***
β_{22} 衰え→評価	-.13 *	-.17 *	-.03	-.22 **	-.20 **	-.32 ***	-.23 **	-.22 **
β_{23} 志向の転換→関心	.20 *	.25 **	.16	.14 *	.14	.16 *	.09	.02
β_{24} 余裕と成熟→評価	.19 **	.26 ***	.13 *	.16 ***	.18 **	.25 ***	.10	.19 ***
自己概念→自己概念								
β_{31} 関心→評価	-.44 ***	-.44 ***	-.48 ***	-.34 ***	-.43 ***	-.40 ***	-.35 ***	-.31 ***
β_{32} 評価→自尊感情	.36 ***	.36 ***	.29 ***	.42 ***	.31 ***	.42 ***	.30 ***	.36 ***

b）社会的

	男				女			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
老い→老い								
β_{11} 衰え→志向の転換	.45 ***	.52 ***	.66 ***	.60 ***	.61 ***	.57 ***	.48 ***	.60 ***
β_{12} 余裕と成熟→志向の転換	.23 **	.20 **	.33 ***	.21 ***	.24 ***	.19 ***	.34 ***	.20 ***
老い→自己概念								
β_{21} 衰え→関心	.17	.00	.19	.03	-.08	.02	.06	.30 **
β_{22} 衰え→評価	-.16	-.16 *	-.18 *	-.33 ***	-.24 **	-.15 *	-.36 ***	-.20 **
β_{23} 志向の転換→関心	.33 ***	.44 ***	.32 ***	.43 ***	.46 ***	.44 ***	.16 *	.23 ***
β_{24} 余裕と成熟→評価	.27 ***	.23 **	.21 **	.17 **	.15 *	.26 ***	.13 *	.23 ***
自己概念→自己概念								
β_{31} 関心→評価	-.24 **	-.21 **	-.18 *	.02	-.33 ***	-.25 ***	-.15 **	-.11
β_{32} 評価→自尊感情	.39 ***	.42 ***	.38 ***	.51 ***	.41 ***	.40 ***	.36 ***	.44 ***

c）内　的

	男				女			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
老い→老い								
β_{11} 衰え→志向の転換	.45 ***	.52 ***	.66 ***	.60 ***	.61 ***	.59 ***	.47 ***	.62 ***
β_{12} 余裕と成熟→志向の転換	.24 **	.20 ***	.33 ***	.21 ***	.24 ***	.20 ***	.35 **	.20 ***
老い→自己概念								
β_{21} 衰え→関心	.34 **	.16	.28 **	.39 ***	.17 ***	.30 ***	.34 ***	.60 ***
β_{22} 衰え→評価	-.13	-.16 *	.06	-.08	-.22 **	-.18 **	-.22 **	-.15 *
β_{23} 志向の転換→関心	.26 **	.37 ***	.30 **	.28 ***	.17 *	.18 *	.11	.08
β_{24} 余裕と成熟→評価	.27 ***	.21 **	.24 ***	.19 ***	.21 ***	.27 ***	.17 ***	.28 ***
自己概念→自己概念								
β_{31} 関心→評価	-.45 ***	-.45 ***	-.55 ***	-.33 ***	-.38 ***	-.45 ***	-.38 ***	-.35 ***
β_{32} 評価→自尊感情	.52 ***	.48 ***	.51 ***	.51 ***	.57 ***	.59 ***	.55 ***	.59 ***

Table3　つづき

d）生活的（健康）

	男				女			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
老い→老い								
β_{11} 衰え→志向の転換	.42 ***	.44 ***	.63 ***	.56 ***	.53 ***	.59 ***	.47 ***	.54 ***
β_{12} 余裕と成熟→志向の転換	.23 **	.19**	.33 ***	.22 ***	.24 ***	.20 ***	.35 ***	.20 ***
老い→自己概念								
β_{21} 衰え→関心	.37 ***	.25 **	.50 ***	.56 ***	.34 ***	.52 ***	.49 ***	.61 ***
β_{22} 衰え→評価	-.32 **	-.22 **	-.16	-.31 ***	-.15 *	-.31 ***	-.30 ***	-.15 *
β_{23} 志向の転換→関心	.20 *	.22 **	.14	.13 *	.02	.01	.04	.04
β_{24} 余裕と成熟→評価	.27 ***	.26 ***	.12 *	.18 ***	.12 *	.25 ***	.19 ***	.19 ***
自己概念→自己概念								
β_{31} 関心→評価	-.33 ***	-.45 ***	-.49 ***	-.36 ***	-.49 ***	-.39 ***	-.40 ***	-.46 ***
β_{32} 評価→自尊感情	.36 ***	.17 *	.22 ***	.35 ***	.16 *	.37 ***	.29 ***	.29 ***

e）生活的（経済）

	男				女			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
老い→老い								
β_{11} 衰え→志向の転換	.45 ***	.51 ***	.67 ***	.60 ***	.59 ***	.58 ***	.49 ***	.62 ***
β_{12} 余裕と成熟→志向の転換	.25 **	.20 **	.34 ***	.22 ***	.24 ***	.19 ***	.35 ***	.20 ***
老い→自己概念								
β_{21} 衰え→関心	.36 ***	-.03	.39 ***	.35 ***	.16	.24 **	.29 ***	.40 ***
β_{22} 衰え→評価	-.09	-.15 *	-.14	-.12 *	-.10	-.21 ***	-.28 ***	.03
β_{23} 志向の転換→関心	.10	.32 ***	.14	.16 *	.20 *	.20 **	.00	.06
β_{24} 余裕と成熟→評価	.26 ***	.31 ***	.32 ***	.34 ***	.28 ***	.39 ***	.26 ***	.38 ***
自己概念→自己概念								
β_{31} 関心→評価	-.47 ***	-.50 ***	-.40 ***	-.39 ***	-.51 ***	-.39 ***	-.37 ***	-.50 ***
β_{32} 評価→自尊感情	.37 ***	.41 ***	.32 ***	.37 ***	.36 ***	.43 ***	.31 ***	.37 ***

注．***p<.001，**p<.01，*p<.05

適合度の検証からは，モデルは十分な適合をもつことが示された。ここから，中高年期における発達を考慮するために作成した老いと自己概念からなる仮説モデルは，妥当性を有することが示唆された。

考　察

先行研究を集約することによって設定された中高年期の発達に関する理論仮説モデルは，共分散構造分析によって妥当性が認められた。ここでは，別の角度からさらにモデルの妥当性を検討する。すなわち積み重ねた検討をもとに設定された各々のパスが先行研究と矛盾がないかを検証し，整合性の点から妥当性を再確認していく。

老いから老いへのパス／自己概念から自己概念へのパス　老いのある側面から他の側面

へのパス，そして自己概念3変数間のパスは，もとより相互の関連性が高いために，その妥当性が推測された。老いから老いへのパスとしては，衰えから「志向の転換」，「余裕と成熟」から「志向の転換」の2つが設定された。すべての性・年齢群・自己領域においてパスが有意であったため，妥当なパスだったと判断される。一方，自己概念から自己概念へのパスとしては，「関心」から自己評価へのパス，そして自己評価から自尊感情へのパスの2種が設定された。社会的自己に関する分析において，ポスト期の男女とも，「関心」から評価へのパスが有意でなかった以外は，すべてのパスは有意であった。若本（2003），若本・無藤（2004）によると，ポスト期における社会的自己に対する「関心」の得点は，それまでの発達期と比べ大幅に低い値を示している。ポスト期は66歳から75歳が該当し，ほとんどの人たちが社会の一線から引退している。そのため社会的自己に含まれる職業や社会的立場に対する「関心」が低下し，心理的なインパクトを減じていると思われる。よって，自己評価に対して「関心」が意味ある効果を示せなかったことは了解されるであろう。ここから，自己概念をめぐるパスの設定も妥当であったと考えうる。

老いから自己概念へのパス　老いから自己概念へのパスは，有意なもの，有意でないもの双方が見出された。しかし，これはむしろ各々の群における発達的特徴を反映していると見なすべきであろう。老いから自己概念へのパスとして設定されたのは，衰えから「関心」へのパス，衰えから自己評価へのパス，「志向の転換」から「関心」へのパス，「余裕と成熟」から自己評価へのパスの4種であった。「余裕と成熟」から自己評価へのパスはすべてが有意であり，若本・無藤（2006b）において見出された「余裕と成熟」のもつ自己評価への強い規定力と符合する結果であった。

しかし，他の3つのパスは有意でない場合も見られた。衰えから「関心」に対してひかれたパスでは，社会的自己においては男女ともほとんど規定力がなかった。また，「志向の転換」から「関心」へのパスに関して，女性の生活的自己（健康），外見的自己ではほぼ規定力が見出されなかった。加えて，内的自己，生活的自己（経済）も中年後期・ポスト期の女性ではパスが有意ではなかった。別の角度から見たとき，男女ともに中年後期では有意ではないパスを生じる傾向があった。社会的自己は役割や仕事を内容とする自己領域である。よって，身体面や心理社会面の衰えの自覚が直接的に影響を及ぼさないことは納得できる結果である。「志向の転換」が「関心」を喚起する老いの側面であることは，若本（印刷中b）において見出されている。その内容は，老いに伴う自己変容である「志向の転換」を経験することによって，当該部分の自己領域に対する関与が高まるというものである。本章において，女性の身体面に関してパスが有意でなかったのは，自己変容の経験の有無と身体面へ関与する程度が関連しない，すなわち老いの経験とは別次元で中高年女性の健康および外見への「関心」が存在すると考えられる。中高年女性の美容と健康に対する希求を鑑みるに，経験的に了解される見解である。中年後期・ポスト期の女性，また中年後期男女において有意でないパスが見られやすいことに関しては，中高年期の前

半と後半の相違（若本，印刷中a），また非関与と補償に特徴づけられる中年後期との知見（Heckhausen，2001；若本・無藤，2006a）によって理解しうるであろう。すなわちその影響が最も顕著に見られる老いの端緒および変化の渦中である中年前期を過ぎ，中年後期では老いが及ぼす心理的影響が減じたものと考えられる。

以上のように，有意であったパスのみならず，有意でないパスに関しても一定の合理性をもった説明が可能であった。したがって，本稿における知見と先行研究における知見との間には整合性があるものと見なされ，モデルの妥当性に問題はないと思われる。

総合的考察

本研究では，中高年期の発達を捉えるにあたり，この時期固有の文脈的要求である老いに加え，自尊感情，領域個別的な自己評価と「関心」を用いてモデルを作成し，妥当性の検証を行った。共分散構造分析の結果から，また各群におけるパスの解釈からも，本モデルの妥当性が確認された。先行研究では，中高年期の発達において老いが重要な役割を果たすことや（e.g.，岡本，2002），自己概念が老いのネガティブな影響に対して緩衝機能をもつことが指摘されてきた（e.g.，Baltes & Baltes，1990）。しかし，老いと自己概念を関連づけ，具体的・包括的に検討されたことはなく，その心的機能に関して実証的な証拠は欠如していた。これらが明らかにされた点において，本研究の成人発達研究に対する意義が見出されるであろう。

本研究は，モデルの作成と妥当性の検証に留まったが，性・年齢・自己領域ごとのパスの様相には差異が見られ，そこには各ジェンダーの，ならびに各年齢群のもつ特徴が現れていると考えられる。今後，さまざまな先行研究との照合によって，それらの特徴を解釈し，意味づけしていくことによって，中高年期の発達をより明確に描き出していくことが可能になると思われる。一方，共分散構造分析の適合度は単にサンプルへの適合を示している可能性をもつ（服部，2002；山本・小野寺，1999）。したがって，今後交差妥当化などの手続きなどによって，モデルのさらなる検証と洗練を経ることが必要とされる。

文　献

Baltes, P.B.（1987）. Theoretical proposition of life-span developmental psychology : On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology.* **23**, 611-626.

Baltes, P. B., & Baltes, M. M.（Eds.）（1990）. *Successful aging : Perspectives from the behavioral sciences.* New York : Cambridge University Press.

Gilligan, C.（1986）. もうひとつの声（岩男寿美子，監訳）. 東京：川島書店.（Gilligan, C.（1982）. *In a different voice : Psychological theory and women's development.* Boston : Harvard University Press.）

Graziano, W. G., Jensen-Campbell, L. A., & Finch, J. F. (1997). The self as a mediator between personality and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology.* **73**, 392-404.

長谷川寿一 (2000). 認知発達研究における進化心理学の可能性. 第3回認知発達理論研究会例会ショートレクチャー資料. http://beep.c.u-tokyo.ac.jp/thase/toshicog.html

服部 環 (2002). 仮説をモデル化し検討する：構造方程式モデリング. 渡部 洋 (編), 心理統計の技法 (pp.151-166). 東京：福村出版.

Heckhausen, J. (2001). Adaptation and resilience in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development* (pp.345-394). New York : John Wiley & Sons, Inc.

星野 命 (1970). 感情と心理と教育 (1, 2). 児童心理, **24**, 1264-1283, 1445-1477.

伊藤忠弘 (2002). 自尊感情と自己評価 船津衛・安藤清志 (編), ニューセンチュリー社会心理学：1 自我・自己の社会心理学 (pp.96-111). 東京：北樹出版.

James, W. (1890). *Principles of psychology.* New York : Henry Holt.

Lachman, M. E., & Bertrand, R. M. (2001). Personality and the self in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development* (pp.279-309). New York : John Wiley & Sons, Inc.

Marsh, H. W., & Hattie, J. (1996). Theoretical perspectives on the structure of self-concept. In B. A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept* (pp.38-90). New York : Wiley.

水間玲子 (2002). 自己評価を支える要因の検討：意識構造の違いによる比較を通して 梶田叡一 (編), 自己意識研究の現在 (pp.115-151). 京都：ナカニシヤ出版

中村陽吉 (1990).「自己過程」の社会心理学. 東京：東京大学出版会

岡本祐子 (編著). (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程. 京都：ミネルヴァ書房

若本純子 (2003). 老年前期における心理的適応と規定因：主観的老いの経験, 主観的年齢, 多次元的自己に注目して. お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」平成14年度公募研究成果論文集, 237-248.

若本純子 (印刷中a). 中高年期の自己評価における発達的特徴――自尊感情との関連, および領域間の関連に注目して―― パーソナリティ研究.

若本純子 (印刷中b). 中高年期における個別領域的な「関心」と老いとの関連. 日本発達心理学会第18回大会発表論文集.

若本純子・無藤 隆 (2004). 中年期の多次元的自己概念における発達的特徴――自己に対する関心と評価の交互作用という観点から―― 教育心理学研究, **52**, 382-391.

若本純子・無藤 隆 (2006a). 中高年期における主観的老いの経験 発達心理学研究, **17**, 84-93.

若本純子・無藤 隆 (2006b). 中高年期のwell-beingと危機――老いと自己評価の関連から―― 心理学研究, **77**, 227-234.

Whitbourne, S. K. (2002). *The aging individual physical and psychological perspectives.* (2nd

ed.). New York : Springer Publishing Company.
山本嘉一郎・小野寺孝義（1999）. Amosによる共分散構造分析と解析事例. 京都：ナカニシヤ出版.

わかもと　じゅんこ（心理学）